

私は一九七九年に自治医大を卒業。八五年、今の病院に外科医として着任して、早くも二十年が過ぎました。

長く医者をしていると忘れることができない患者さんが何人かいます。その一人の患者さんとの話をしたいと思います。

ある乳がん患者

大学を卒業し、すぐ兵庫県立尼崎で研修を始めました。内科や外科などすべての科を研修する初期研修です。外科の研修を始めて間もないころ、四十歳代の乳がん患者さんを受け持つことになりました。

私にとって初めての乳がん患者さんであり、どのように接すればよいか迷っていました。が、

「医師とは何か」私の原点

その女性Kさんは、すでにがんの告知も受けておられ、とても明るいさっぱりとした性格の方

でした。診察時には病気や手術に関することはもちろん、病気とは関係のない話もいろいろと

私にとって初めての乳がん手術

が心配で、時間があれば病室に行っては話をしていました。やがてKさんは退院。私も初期研修を終えて地方の小さな病院で外科医として働きました。二年ほど過ぎ、再び尼崎病院の外科で働き始めました。

再発して再会

しばらくして、再発乳がん患者さんの主治医になってくれと頼まれ、その患者さんの名前を見てハツとしました。Kさんではほぼ全身に広がり、当時の医療では手の施しようのない、余命わずかとしか考えようのない状態でした。

しばらくして、わずかな会話の後、病室を出ようとした時、ラブレターだから後で読んでね」と一通の手紙をKさんからいただきました。

病室に行く、Kさんも私のことを覚えていてくれて、明るく以前と同じ笑顔でしたが、病状を自覚しているようでした。日に日に状態は悪化して行き、私は何と声をかけたらよいのか悩み、また日々の仕事も多く、

その手紙には、今までのことに対する感謝の言葉が書かれており、最後に「今の先生は忙しい中、てきぱきと仕事をされ、自信に満ちたとても立派な先生に見えます。でも、私は何でも話を聞いてくれた昔の先生の方が好きでした」と。

自分で医師とは何か。患者さんにとって医師とは何か。深く考えさせられた忘れられないことのできない患者さんでした。

自分にとって医師とは何か。患者さんにとって医師とは何か。深く考えさせられた忘れられないことのできない患者さんでした。

きやま よしあき 木山 佳明 2期生、1979年卒



2002年に新築された外来棟で、当地方も医師不足で救急患者を診る施設が少なくなり、当院に来る救急患者が増えている

公立梁瀬病院

【私の勤務地】当院のある但馬地方は兵庫県の北部に位置する。東京都の総面積とほぼ同じ広さに人口わずか20万弱で、65歳以上の高齢化率25%を超える。但馬牛で有名。当院はベッド数50床で、内科、外科、放射線科の常勤医師5人すべてが自治医大卒業医師だ。

自分で医師とは何か。患者さんにとって医師とは何か。深く考えさせられた忘れられないことのできない患者さんでした。

自分で医師とは何か。患者さんにとって医師とは何か。深く考えさせられた忘れられないことのできない患者さんでした。

(次回予定は秋田県)

